

2022年 連続公開講演会

地球的危機の「挑戦」と宗教・文明の「応戦」——パンデミックを契機として

<開催趣旨>

1972年5月、東洋哲学研究所創立者・池田大作先生と文明史家アーノルド・J・トインビー博士は、後に『二十一世紀への対話』として結実する対談を開始した。宗教と文明への透徹した眼を持つ両者は、その語らいのなかで人類の地球的危機を予見していた。博士は「人類の生存に対する今日の脅威が人間自身に起因しているというのは、恥ずべきことです。しかも、自己中心性克服への精神的努力を払いさえすれば、われわれにはまだ自己を救済する力があるのに、そうした状況のなかでもなお自己救済を怠ったとしたら、それこそ、ますますもって恥ずかしいことです。われわれは、そうした状況にあることを恥じ、もっと自己克服への努力を払う刺激とすべきです。さらにまた、われわれはそれに成功する力をもっていることを知り、そこから希望と勇気と活力を得て、この機に应じて立ち上がるべきです」（『二十一世紀への対話』）と述べた。それは博士の文明史観である「文明というものは、つぎつぎに間断なく襲いきたる挑戦に対応することに成功することによって誕生し、成長するものである」（『試練に立つ文明』）という挑戦と応戦の法則（law of challenge and response）に基づいた考えである。

それに対して、池田先生は「問題は人間が自分自身の宿命をいかに転換し、向上させていくかにあるわけです。これには、人間生命に内在する利己性や種々の欲望にどのように対処するか、ということが含まれるでしょう。このことから、人類が生き延びるためには、科学とともに、どうしても宗教が必要であることが明らかになってくると思います」（『二十一世紀への対話』）として、文明を構成する人間の内発性を開花させる宗教の重要性を訴えている。

猛威を奮うコロナウイルスは、感染拡大という意味でのパンデミックから次第に恐怖を拡大し、人々の宗教観、死生観、経済観にも多大なる影響を及ぼしている。また国家間は事実上、往来をすることができず、これまでのグローバル化によってもたらされた異文化を体験する・接触する・認識する、そして他者と直接の対話をするということすらもできなくなっている。そこに分断と緊張の危機が生まれ、不寛容と憎悪によってウクライナ戦争までもが勃発した。こうした未曾有の「挑戦」に対して、人類がいかにして立ち上がり「応戦」していくか——地球的危機におけるパンデミックを契機として、人類の未来を指し示す宗教と文明による「応戦」という視点から論じ合う講演会を開催する。